

木曾川

岐阜県垂井町

ふるさとの街・探訪記

東西交通の要衝として
栄えてきた垂井町

エリア・レポート

相川扇状地に発達した
垂井町の水環境

気ままに JOURNEY

昔日のドラマが浮かぶ、秋の休日

歴史ドキュメント

デ・レーケと日本人技師によって
完成した木曾川改修計画

TALK&TALK

『蘭人工師デレーケの治水思想(二)』

民話の小箱

業平寺の大蛇



木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに
考えていきたいと思っています。
秋号は、交通の要衝として栄えてきた垂井町から、
争乱の歴史や、扇状地の水事情を中心に、
歴史ドキュメントでは、
「明治改修」シリーズの第四編をお届けします。



ふるさと探訪記

岐阜県垂井町

東西交通の要衝として

栄えてきた垂井町

岐阜県の西南部に位置する垂井町は、古くから畿内と東国を繋ぐ交通の要衝の地。壬申の乱や関ヶ原の戦いなど、歴史の表舞台にしばしば登場しています。近世には、中山道の宿場として栄え、現在は、積極的な工場誘致によって、豊かな田園工業都市として発展を続けています。

古代からの交通の要衝地

岐阜県不破郡垂井町は、岐阜県の南西部に位置し、濃尾平野の北西端にあり、

関ヶ原町を発した相川が、岩手川、大石川、大滝川、梅谷川などの溪流を

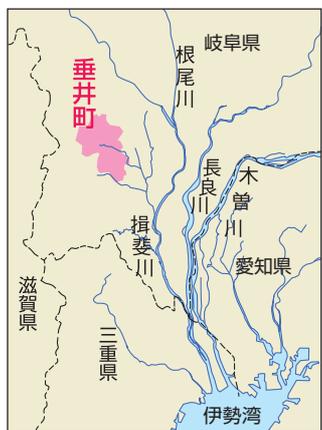
合わせて東川の扇状地が町の中央から東部・南東部にかけて広がり、濃尾平野に続いています。北部から北西部にかけて池田山地が連なり、南西部には南宮山地がそびえています。垂井町

垂井町空撮

の西部は両山地に挟まれた極めて狭隘な平坦地となっており、この狭い平坦部が畿内と美濃以東を結ぶ重要な交通路であったため、古来より垂井は交通の要衝となってきました。古代美濃の中心地であり、近世には中山道・垂井宿として栄えてきましたが、近年は、恵まれた自然と豊富な歴史遺産を活かした観光に力を注ぐ一方、金属工業・繊維工業などの工場を誘致、田園工業都市として発展しています。

古代美濃国の中心地

早くから農耕文化が浸透した地域であるため、弥生遺跡は町内各所で発見されています。遺跡の場所から、住居



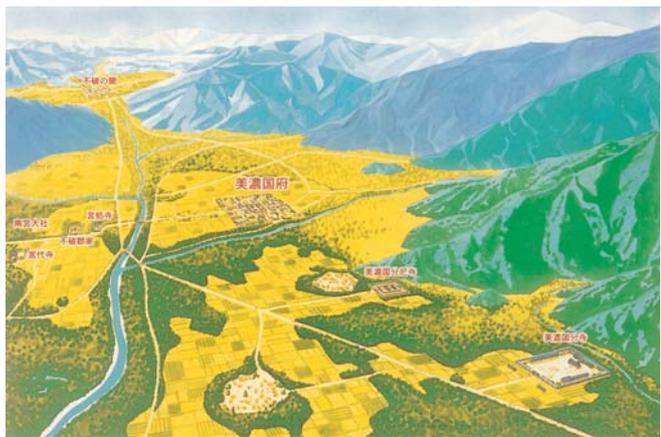
は扇状地扇端の低湿地を避け、扇頂・扇央部の高燥地に構えていたと考えられます。



美濃国府跡の発掘調査(平成3年)

古代における最大の内乱「壬申の乱」(六七二)で、大海人皇子が勝利を収めた要因として、いち早く「不破道」を塞ぎ、東国の軍を近江朝廷方に付かせなかったことが挙げられます。「不破道」を確保した大海人皇子は、不破郡家から野上行宮(関ヶ原町)に入り美濃・尾張勢を中心とした軍を近江に進め大友皇子に勝利しました。

古代の律令制度では、全国を六〇余の国に分け、それぞれに国府(地方の役所)を置いて統治しました。美濃国の国府は、現在の垂井町府中にあったことが平成三年からの発掘調査で明らかになっています。美濃国の中では西に偏った位置にあ



国府周辺想像図

る当地に国府が置かれた背景には、不破関(関ヶ原町)の存在が大きいと考えられています。不破関は池田山地と南宮山地がもつとも接近した狭隘地に設けられた東山道の関で、北陸道・愛発関、東海道・鈴鹿関と並んで「三関」と称された重要な拠点でした。不破関を管理する美濃国の国府はその間近にある必

ふるさとの街・探訪記

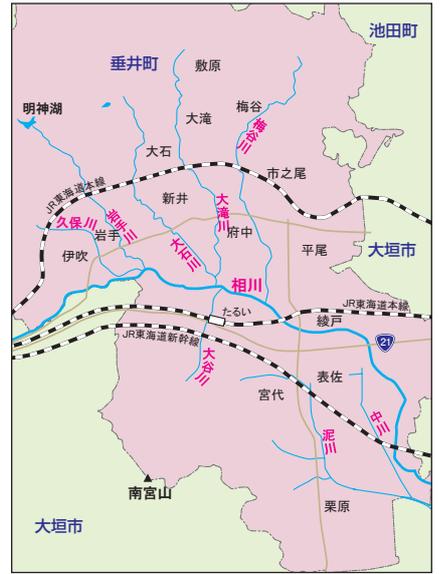


青野ヶ原

垂井は、中世以降も戦乱の舞台として、しばしば歴史に登場します。
南北朝期の建武四年（一三三七）、後醍醐天皇の要請を受けた奥州の北畠顕家は、大軍を率いて京を目指し

戦乱の舞台となった垂井

要があつたのでしよう。
国府の東には美濃国分尼寺、さらに東に美濃国分寺（大垣市青野町）が建立され、不破郡家についても相川を挟んだ南の宮代にあつたとする説が有力です。東山道の美濃国に入って最初の宿駅・不破駅（現大垣市南宮神社）（現在の南宮大社）などの存在と併せて、当地は古代における美濃国の政治・文化の中心を担った地域でした。



た。これに對して北朝方は西濃の各地で反撃に出ますが、特に青野ヶ原（垂井町・大垣市）で大規模な戦闘が行なわれました。
正平八年（文和二年）（一三五三）には、足利義詮率いる幕府軍が南朝方に敗れ、義詮は北朝・後光厳天皇を奉じ、美濃守護土岐氏を頼って垂井に逃れるという事変が起こっています。天皇が京へ戻るまでの四ヶ月程、垂井と小島（揖斐川町）を頼宮（仮の宮殿）としていますが、垂井頼宮の場所については諸説あり、宮代の北にある「御所野」が地形的に一番有力とされています。このとき、垂井の人たちが花車を曳き回し天覧に供してお慰めしたといわれ、それが今も、垂井曳軒祭として残り、毎年五月二〜四日に行われています。

木曾材運搬の中継地・表佐湊

豊臣秀吉は、天下を掌握すると京都東山に方広寺を建立し、天正一七年（一五八九）には大仏殿の建立をするための材木を諸国から徴発しました。こ



曳軒祭の風景

の時、美濃国の武将六名に、木曾材の輸送が命じられています。集められた役夫は六千余名で、その内の五千余名は表佐・柏原（滋賀県）間の陸送を担っていますが、池田輝政の役夫千名は、「犬山より表佐まで河下」（秀吉下知状）にあてられています。当時、木曾材の京への輸送は、木曾川を下って犬山を中継地とした後、表佐湊で陸揚げされ、琵琶湖の朝妻湊から再び舟運を利用するのが一般的だったようです。
犬山から表佐までのルートについては史料がありませんが、木曾三川は網の目のように入り組んでいたため河口まで廻ることなく木曾川から揖斐川に入って、表佐湊のある相川までさかのぼったと考えられています。その後の、禁中造宮、伏見城築造においても表佐湊は、木曾材の集積地となっています。

関ヶ原の戦いと幕藩体制

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いは、交通の要衝であるこの地域の位置付けを最も強く表す出来事でした。戦いでは、南宮山に毛利・吉川勢、南宮山麓に長束・長曾我部などの軍勢が陣を布き、垂井町域も戦場となりました。南宮神社も戦火にあつて社殿・仏堂ごとく焼失しますが、徳川家光によって再建され今日に至っています。



関ヶ原合戦陣取図

関ヶ原の戦い以後、幕藩体制下の垂井町域は、幕府直轄領が設置され、ほかに多くの旗本領、高須藩領、館林領、南宮神社領、金蓮寺領などに分割領知されました。やがて尾張藩領が暫増し、幕府直轄領の多くが大垣藩領所となります。正保帳帳などによると垂井町域には一五ヶ村がありましたが、複数の領主が分割統治した村も多く、府中村などは五人の領主の分郷となっていました。そのため、他領との間ではしばしば紛争が生じました。
有力な旗本の中には、岩手を中心に領知した竹中氏がいました。豊臣秀吉の軍師として名高い竹中半兵衛重治の嫡子・重門が関ヶ原の戦いで東軍に加わり戦功を挙げ代々領有してきた岩手の地を安堵されました。幕末の竹中家当主・重固は、幕府の陸軍奉行を務め、長州征伐、鳥羽伏見の戦いで幕府軍を率いて戦っています。

中山道垂井宿と助郷



木曾街道六十九次之内「垂井」 広重画

江戸時代の中山道・垂井宿は、脇往還・美濃路の起点でもあり、交通の要所として重要な役割を果たしていました。美濃路は中山道・垂井と東海道・熱田の宮を結ぶ利用度の高い街道でした。垂井宿の家数は、寛文五年（一六六五）の記録では一〇五軒でしたが、寛政一二年（一八〇〇）には三二八軒となっており、通行の増加に伴って発展した様子がわかります。

宿場の重要な役割に、人馬を用意して公用の貨客を輸送する伝馬役があり、中山道の宿は歩行役五〇人・馬役五〇疋と定められていました。宿が伝馬役を務め維持していくことは大変な負担であったため、領主による助成が行なわれました。垂井宿は、当初は高須藩が、寛永五年（一六二八）に幕府領となつてからは幕府が助成しています。

宿場が常備している宿人馬より継ぎ立てが多い時は、助郷として付近の村から不足の人馬を徴発しました。垂井宿の助郷は、栗原・綾戸・表佐の他、現大垣地域の村を合わせて九ヶ村で、伊吹・岩手・府中・平尾・梅谷・敷原・大石などの村々は西の関ヶ原宿の助郷に指定されていきました。助郷は指定さ

れた村にとつても大きな負担で、運用について宿との間でしばしば対立が起こっています。



垂井追分道標(町指定史跡)

助郷には、助郷を務めることが困難な村がでた場合に代わりに指定される代助郷や、大通行に際して臨時に指定される当分助郷などがありました。文久元年（一八六一）和宮降嫁の通行にあつては、越前国坂井郡、近江国蒲生郡の村々にも垂井宿の当分助郷が割り当てられました。これら遠隔地の村は、実際に人馬を提供することは困難でしたから人馬賃を支払うこととなりました。

垂井町の成立と近代工業化

一八六八年に発足した明治新政府は、版籍奉還、廃藩置県を断行し、地方の行政区分も大きく変更を行いました。明治一〇年（一八七八）発布の郡区町村編制法で垂井村に不破郡の郡庁が置かれました。明治二二年（一八八九）には、町村制施行に伴って垂井村が垂井町となりました。その後、村々の合併が進み、現在の垂井町が誕生するのは、昭和二九年（一九五四）で、九月に垂井町・岩手村・府中村・宮代村・表佐村と荒崎村大字綾戸が合併、同一二月合原村大字栗原を編入して現

在に至ります。

明治時代に入つて宿駅制度が廃止された後も、垂井宿周辺は中山道と美濃路の追分として栄え、東海道本線が開通すると、人と物資の集散地としてさらに発展しました。呉服店、酒屋などの商家が軒を連ね、付近で生産された茶、繭、生糸を取り扱う商社なども設立しています。

東海道本線は、関ヶ原～大垣間が明治一七年（一八八四）に開通、垂井停車場が開業しています。太平洋戦争下の昭和一九年（一九四四）、下り本線は、急勾配を回避するために垂井町の北部を通る迂回線に切り替えられ、新垂井駅が設けられました。戦後、垂井駅に停車する下り普通列車を運行するために単線（垂井線）が通されました。下りだけの停車場として新垂井駅も存続していましたが、昭和六一年（一九八六）のダイヤ改正で新垂井駅は廃止されま

した。農家の副業として養蚕が盛んとなり、やがて製糸業へと発展。さらに織物業、製茶業などの工場も設立されました。大正九年（一九二〇）に垂井町最初の金属工場として自転車のリムを生産する工場が、さらに昭和九年（一九三九）には大手繊維メーカーの工場が誘致され、近代工業の発展が進みました。戦後も、京阪神圏と中京圏の中間に位置する特色を生かして積極的な工場

誘致が行なわれ、繊維・金属・機械工業などの工場が進出し、昭和四三年（一九六八）には、製造品出荷額が県内市町村で八番目、町村の中ではトップとなっています。地場産業としては、「表佐瓦」の生産が江戸時代から続いており、県下最大級の瓦産地となっています。構造改善が進む農業では、施設農業が発展しており、特に洋ラン栽培は昭和五二年宮代地区に温室団地が建設されて県下一位の出荷を誇っています。

一方、豊かで潤いのある町民生活を目指して、朝倉運動公園や相川河川敷広場の整備、図書館・歴史民俗資料館・歴史文庫センターを併せた複合施設「タライピアセンター」の建設などが進められてきました。町内の豊富な歴史遺産と豊かな自然を生かして観光開発も積極的に行なわれています。

平成一六年に合併五〇周年を迎えた垂井町は、公共下水道の整備や教育環境の充実など、だれもが住みたくなく、人にやさしい町の実現に向けてますます発展を続けています。



朝倉運動公園

参考文献

- 『垂井町史』昭和四四年 垂井町
- 『新修垂井町史』通史編 平成八年 垂井町
- 『垂井町勢要覧』平成一七年 垂井町

AREA REPORT



表左太鼓踊り

です。県重要無形民俗文化財となつている「表佐太鼓踊り」もこうした礼踊りが起源とされています。

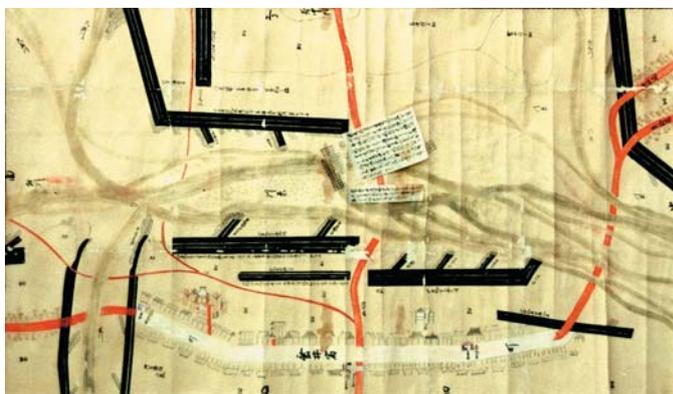
こうした厳しい水事情は、昭和五九年（一九八四）の「西濃用水事業」完成まで続きました。西濃用水は、揖斐川上流の横山ダムを水源として、西濃一市六町に農業用水を供給しており、垂井町では総延長7kmの水路によつて七五〇haの農地が潤っています。

垂井宿と相川渡し

垂井町の市街地にかかる新相川橋から相川を見下ろすと、細い流れに不釣合いな河道と河川敷の広さが目につきます。これは、普段は水量の少ない相川が、一旦大雨が降ると周囲の山地を流下する支流から一気に水が流れ込み増水するからです。

中山道は、垂井宿のすぐ東で相川を渡りますが、橋はなく通常は、人足渡しで渡ることが出来ました。川越人足は垂井村の者が勤め、川越賃金は、水嵩によつて「膝下切水」「腰切水」「乳切水」などと細かく決められていました。さらに増水すると、川留となりました。

垂井宿付近でも相川はしばしば氾濫したようで、「垂井・府中村相川論所絵図」には、宿と相川の間にも二重堤が築かれている様子が描かれています。この絵図は、垂井村と対岸の府中村の水論を图示したもので、府中村が乱杭を打ち込み石籠や土俵を伏せて川の瀬の違いをしたため垂井村に水が流れるようになった、これでは町の半分が押流され宿駅の仕事も存続できなくなると垂井村が幕府に訴え出ています。



垂井・府中村相川論所絵図(本龍寺所蔵)

相川の氾濫と改修工事

相川の氾濫による被害は下流の表佐村で多く発生しており、江戸時代の文書には「表佐村相川堤九八間決壊

耕地二五町歩浸水」「(二八二〇)、「表佐村堤五〇間決壊、耕地六〇町歩浸水」(二八五五)などの記述が残っています。明治



渡し場付近の相川

二九年(一九九六)九月の豪雨では相川堤防二ヶ所が決壊するなど、明治大正期においても相川は度々氾濫被害を出しています。

こうした実情を受けて、木曾川上流改修に伴う支派川改修工事として行われた杭瀬川改修に相川も組み込まれました。昭和十一年(一九三六)より開始された改修工事では、垂井町地内国道橋より杭瀬川合流点までの約八・九kmの護岸工、十六ヶ所の床固工などが行なわれました。

昭和三十一年度(一九五六)から、中小河川改修事業として整備が進められていましたが、昭和三四年八月の集中豪雨では、表佐地区など一三カ所で堤防が決壊、同年の伊勢湾台風でも再び決壊し多くの被害ができました。この復旧対策事業が昭和三四〜三九年度にかけて実施され、その後堤防整備、護岸工などが継続して行なわれています。

町民とともに在り続ける相川

現在の相川は、自然が残る身近な川として垂井町の町民に親しまれています。相川水辺公園が整備された河川敷一帯には、樹齢五〇年以上のソメイヨシノがおよそ二〇〇本並び、伸びやかに枝を広げています。満開を迎える毎年四月上旬には、桜まつりが開催され、桜色に染まった園内では、ゲームやバーが行われます。

また、三月下旬から五月上旬まで、リサイクルとして集められたおよそ三五〇匹の鯉のほりが相川の空を一斉遊泳します。その姿は壮観で、花見とあわせて多くの人々にぎわい、華やかな相川を演出しています。



桜まつり開催時の相川

参考文献

- 『垂井町史』昭和四四年 垂井町
- 『新修垂井町史』通史編 平成八年 垂井町
- 『岐阜県治水史』下巻 昭和二八年 岐阜県

昔日のドラマが浮かぶ、 秋の休日

秋空にすっきりと立つ、朱塗りの大鳥居。「どうかご利益がありますように」とくぐりぬければ、歴史探訪の旅が始まります。伝統を、そして祭りを今に伝える垂井町。江戸風情をみせる町家に、漆喰の白壁に、昔日のドラマが浮かび上がってくるようです。

文化を分かつ境界線の町

JR東海道の垂井駅を降りると、美濃国の国府が置かれたという垂井町の緑豊かな風景が広がっています。今ではすっかり穏やかな町も、承久の乱や南北朝動乱など、天下を分かつ合戦の舞台となったところ。南西の方角にゆるやかな稜線をみせる南宮山は、関ヶ原の戦いで毛利秀元などの武将が陣地を構えた山です。

南宮大社

東山道や鎌倉街道が走っていたこの町は、国を掌る覇者たちにとって要衝の地でした。垂井町が関西文化と東海文化を分かつ境界線といわれるのも、こうした歴史的な、そして地理的な性格が影響しているのです。垂井式アークセントと呼ばれる方言は、東京式と京阪式の間にある

あたるものどか。

この町には天下を狙う時の権力者たちの足跡が眠っています。そんな史跡を訪ねて旅することにいたしましょう。

春王と安王の悲話

垂井駅のすぐそばにある金蓮寺こんれんじは、春王丸、安王丸の悲話を残す名刹です。世は室町。足利幕府と対立して敗れた関東管領足利持氏の遺子、春王丸と安王丸は下総国結城城で、幕府

方の捕らわれの身となり、京都へ護送中、この寺で斬首されました。本堂に安置された春王、安王の木像は、あまりにも幼く、乱世の恐ろしさやかなさを後世に伝えているようです。幼い兄弟の墓は、県指定の史跡となっています。



春王・安王の墓

江戸情緒を残す垂井宿

垂井町の中央を東西に走っているのが、中山道です。街道沿いには江戸の風情を思わせる屋敷が軒を並べています。ここは垂井宿。中山道と東海道を結ぶ美濃路の分岐点となる重要な宿場でした。また、南宮大社の石鳥居付近では六斎市が開かれ、宿場の繁栄を支えていました。



垂井宿：油屋宇吉家跡

重要な宿場だけに逗留する人々もVIPクラス。姫宮をはじめ、参勤交代の大名さらに美濃路経由の將軍上洛朝鮮通信使、琉球使節などの大行列があり、特に珍しいものには、中山道ではラクダ、美濃路ではゾウの通行がありました。そんな旅人たちにひとさわ愛されていたのが、垂井の泉です。岐阜県の名水五〇選に選ばれた由緒ある泉で、幹まわり8mの大ケヤキ(県指定



垂井の泉

天然記念物)の根元から湧き出る泉は、枯れることを知りません。その清らかさから和歌にも詠まれ、垂井の地名の起源といわれています。泉の脇には、松尾芭蕉の句碑も建てられています。

垂井はまた美濃紙の発祥の地。国府に近いことから、官設抄紙場すきかみばがありました。街道脇に残された紙屋塚は、歴史の語り部です。垂井の泉の清水を利用して、紙を漉いたと思われます。ほかに、芭蕉ゆかりの本龍寺・時雨庵や美濃路松並木、垂井一里塚や茶所など、江戸風情をたたえる史跡が往時の繁栄ぶりを今に伝えているようです。

家光の威光を伝える南宮大社

垂井宿から南に向かうと、南宮大社の大鳥居が秋空に届けといわんばかり



紙屋塚

垂井町の歳時記

◆南宮大社例大祭◆

5月5日開催

南宮大社から御旅神社まで約2kmを神輿3基が通い、神行式、蛇山神事、還幸舞などが奉納されます。前日4日には、御田植祭が行なわれ、子供たちが苗に見立てた松葉を田植歌にあわせて植えつけをします。

【開催場所】南宮大社



◆金山祭(ふいご祭り)◆

毎年11月8日

地元刀匠の奉仕による古式鍛錬式が行われます。全国から鉱山金属業者の参拝者で賑わいます。

【開催場所】南宮大社



イベントカレンダー

・桜まつり	4月上旬
・伊吹祭り	4月第2日曜日
・垂井曳輪祭り	5月2、3、4日
・泉まつり	7月第1土曜日
・中山道垂井宿まつり	9月第1土曜日
・表佐太鼓踊り	10月第1日曜日
・大石まつり	10月第2日曜日
・ふれあい垂井ピア	11月上旬2日間



交通のご案内

◆名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋IC → 東名・名神高速道路 (約40分) → 大垣IC → 国道258号・21号 (約20分) → 垂井町

◆名古屋方面から公共交通機関をご利用の方

名古屋駅 → JR東海道本線 (約45分) → 垂井駅

お問い合わせ

◆垂井町役場◆

〒503-2193 岐阜県不破郡垂井町1532-1
TEL 0584-22-1151(代) http://www.ginet.or.jp/tarui/



南宮大社の大鳥居

にそびえたっています。高さ二一mの鳥居は東海有数のスケール。こんな大鳥居をくぐればきつとご利益もあることでしょう。金山彦命を主祭神とする南宮大社は、美濃国一宮。全国の鉱山、金属業の総本社として、今も深い崇敬を集めています。関ヶ原の戦いで社殿のすべてを焼失しましたが、三代將軍徳川家光発願により再建されました。

朱塗りの本殿や拝殿、楼門などは、江戸時代の代表的な神社建築として、国の重要文化財に指定されています。

竹中半兵衛ゆかりの地

垂井を代表する武将といえば、竹中半兵衛です。戦国時代の智略が飛び交う中で、豊臣秀吉の軍師として天下への道を開きました。

「美濃に半兵衛あり」と、全国にそ

の名をとどろかせたのが、稲葉山城の乗つ取りです。主従一八名がわずか一日で美濃斎藤氏の居城であった稲葉山城を奪取しました。とはいえ、竹中家は斎藤氏の家臣でした。反旗を翻す原因となったのは、斎藤氏の年賀の席で家臣が半兵衛を侮蔑したためとも、また政務から遠ざけられていた舅父・安藤守就を救うためだったともいわれています。

この後、木下藤吉郎(後の秀吉)の軍師となり、浅井氏攻め、中国攻め、長篠の合戦で智謀神のごとく活躍しました。半兵衛は用兵術と相手の心理を読むことのできる天才的な武将でした。しかも自らの功を語らず常に謙虚。その彼が拠点にしたのが、垂井町の北部にそびえる菩提山城です。城は標高四〇二mの山頂に、南北およそ二六〇



写真上:竹中陣屋跡
写真下:竹中半兵衛重治像(禅幢寺蔵)

m、東西最大幅六〇mの広大な天嶮を利用しており、堅固なつくりと巧妙さは、類を見ない規模になっています。天正七年(一五七九)、半兵衛は播州

三木の陣において、三六歳の若さで病没。陣中で病死する際に秀吉は、京で養生するように戒めたといいますが、半兵衛は「陣中で死ぬこそ武士の本望」と断つたと伝えられています。

岩手の禅幢寺は、竹中氏の菩提寺です。半兵衛の嫡男重門がここに墓を移したようです。関ヶ原の戦いで家康方につき軍功をあげた重門は、岩手を

中心に所領を得て、陣屋を置きました。木造白壁塗りの櫓門、頑丈な門扉、そして濠をめぐらせた竹中氏陣屋跡は、そのまま旗本竹中氏の歴史です。

武勇はもとより、文武両道を重んじる家風は、竹中家及びその家臣団に代々受け継がれていきました。文武両道を指導するために竹中氏が開学した道場善我堂は、明治になって、善我義校、善我学校として発展。現在は瀟洒な白壁を見せる善我記念館

に竹中氏ゆかりの品々が展示されています。

学問や漢文、詩歌を愛した竹中氏一族。

彼らが愛したふるさととは、豊かな表情をたたえ、歴史の足跡を後世に伝えていきます。



禅幢寺

明治改修

第四編

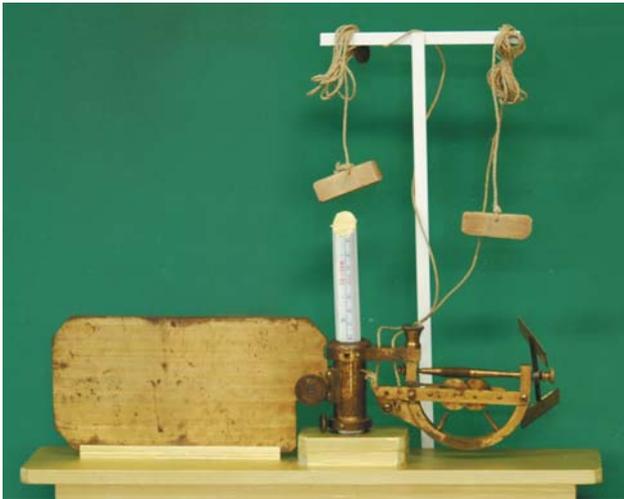
デ・レーケと日本人技師によつて

完成した木曾川改修計画

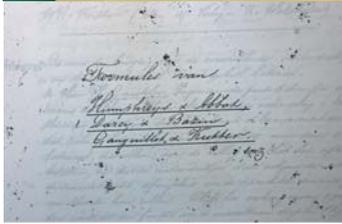
明治一七年(一八八四)、デ・レーケは木曾川改修計画の作成を命じられました。改修計画の作成はデ・レーケの指導を受けた日本人技師によつて進められ、最終的にデ・レーケが手を加え明治一九年に完成しています。改修計画では、木曾・長良・揖斐川を河口まで完全分離することになりました。

新たな測量図の作成

明治一四年(一八八一)、木曾三川下流部では改修計画策定のための測量が行なわれていました。明治八年初春に完成していた測量図は、既に火災により焼失していたため、デ・レーケの提言により、新たな測量図の作成を進めているのです。



明治時代の流速計(波流儀)



エッセルが日本に持ち込んだ流量計算式説明書の表書き

明治一四年七月二一日、三河と木曾川調査のため琵琶湖を船で渡つてきた

デ・レーケは、大垣において大勢の治水共同社の人達に出迎えをうけました。三河の調査が終わつて二七日から八月二日まで養老に滞在し、測量のチェックをしながら、連日、治水共同社の人達と話し合いをしています。八月五日からの木曾谷の調査を終え、一三日に岐阜に到着したデ・レーケは、八月一七日には、輪之内町の片野萬右衛門宅を訪問し、八月一九日には、大垣に滞在して、揖斐川で実施中の測量作業を視察しています。

測量は、地形測量のほか、河川流量を測定する作業も行なわれていました。この頃は、河川の流れの速さを測定するための流速計は「波流儀」と呼ばれていました。

明治一四年二月一六日付土木局長あての文書に「ラルトマン氏波流儀(河水ノ速力ヲ測定スルモノ)当

木曾川ニ於テ使用可致モノ、近日、和蘭国ヨリ工師ムルテル氏方エ到来

候筈ナレハ、且下低水之季節ニシテ、適用之時ナレハ白井濟上京之上ムルテル氏ヨリ使用法方承知為致度候条ニ書かれてるように、流速計をオランダから輸入して、濁水時の河川流量を測定していました。

木曾川の高さの基準は(O.P)

デ・レーケは、木曾川下流概説書(KASSO Vol.2 参照)において「木曾川筋海口マテノ間ニ建設セシ量水標ハ、精密ナル測量ヲ以高低ヲ(高低帳ヲ以テ)総テ互ニ結付ケ置クベシ」と提言していますが、今回の測量では、このことが実行されています。

我が国の高さの基準が定められたのは、明治一二年(一八七九)です。東京湾の平均潮位(略号「O.P.」)を標高〇mとし、明治二四年に、その原点標を東京都千代田区永田町の憲政記念館構内に設置しました。その標高は二四、四一四mです。



現在の木曾川横満蔵水位観測所



明治19年の改修計画縦断面図に書かれた横満蔵量水標附近の図

国の陸地測量部によつて全国の五万分の一地図の作成が始まりましたが、高さの基準が全国に行き渡るのに相当の年月を必要としました。出来上がった地図には「高程ハ東京湾ノ中等潮位ヨリ起算シ米突ヲ以テ示ス」と明記されています。

しかし、河川工事は、水中の仕事が多いため、その河川の最も低い水位を

基準とすることが便利であることから、各河川とも固有の高さの基準を持っていました。その略号は、荒川が(A.P.)、江戸川が(Y.P.)、淀川が(O.P.)のようです。

木曾川は、(O.P.)が使用されてきました。この(O.P.)の略号の意味については不明のままでしたが、最近になって尾張湾基準水位(Owairwan Peil)の略号であり、この〇点の標高は、T.P. マイナス〇・六一四五mであることがわかりました。

測量作業と並行してデ・レーケは、木曾川改修計画を考えていました。明治一三年の秋には腹案が出来ていたようです。

このことについては山崎潔水五等属が次のように報告しています。「木曾長良揖斐三川分流下目論見絵図ヲ調整工師トレイケ氏今回出張ノ際持参有之因テ別紙ニ写取一覽ニ供シ候然シ此程木甲第式百九拾号ヲ以測量増加ニ付目論見相立伺候其箇所々々成功ノ上不成テハ確タル詳細目論見図面ヲ製兼候趣此段上陳仕候也」

明治十三年十一月八日

山崎五等属

土木局長代理

中村権大書記官殿」

順調に進む修築工事

調査と並行して進められている修築工事も順調に進展し、明治一二年

(一八七九)夏には、松内(現輪之内町)・今尾村(現海津市)・船附・大牧村(現養老町)・塩喰村(現輪之内町)地先が完成しています。

この年は、コレラが全国的に蔓延し、患者総数一六万二千六百三十七人、死者は一〇万五千七百八四人に上りました。木曾三川流域でも各地でコレラが蔓延し、修築工事に影響を与えました。安田村(現海津市)や上野輪新田(現桑名市)では作業員が集まらないため工事の施工を延期しています。この模様を山崎潔水五等属は、デ・レーケ付の楢林高之六等属へ「安田村ならびに上野輪新田 該村始近傍虎列刺病蔓延シ人足仕出方困却、戸長ヨリ病勢稍減少候迄暫着手延期願出、其情実難黙止ニ付聞届本月十四日着手」と知らせています。

また、修築工事箇所の選定や工法は、すべてデ・レーケの指示によっています。したがって、コレラのためデ・レーケの出張が延期になったために、選定された施工箇所がなくなり、山崎潔水五等属は、九月二日付文書でもって、次のようにデ・レーケの出張を求めています。これも修築工事が順調に進展している証と言えます。

「先般工師出張之際示授有之候：来月十七日頃落成之目途ニ付、其他川工事ハ示授箇所無之、因テ十月上旬ニハ是非出張之上施業場所御示授ニ相成候様致度……倍秋氣ニ移此程ハ虎列刺病勢

減消シ大ニ安心致申候、最早御出張ヲ仰キ候テ可然ト存候間、此段御承知相成度何分之御回報至急相待候也」

デ・レーケへ木曾川改修計画の命

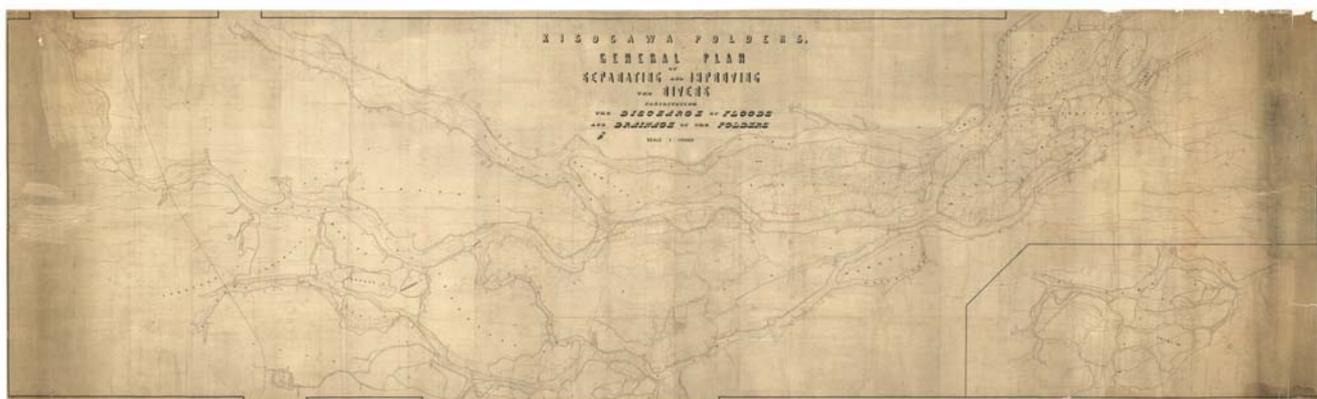
明治一七年(一八八四)は、全国的に水害が多く凶作の年でした。農民の生活は深刻化して、各地で農民騒動が起りました。その規模は、明治期で最大と言われています。

木曾川においても七月に大洪水が発生し、修築工事により施工した施設が損傷を受けるなど各地で大きな被害が発生しました。

またこの頃、木曾川筋では、立田輪中南端の又右衛門・梶島と呼ばれている二つの猿尾の延伸工事を巡る争議が発生していました。

そうした中で木曾川改修の着手に向けて大きく前進しました。一〇月六日、政府はデ・レーケに対して、木曾川改修計画の作成を命じるとともに、清水技師補・佐伯技師補・米倉六等属・有馬八等属・山岡八等属らに、デ・レーケ付けを命じました。

清水(旧姓臼井)濟技師補は、明治一二年卒業の東京大学理学部土木選科第二期生、佐伯敦崇技師補は、明治一三年卒業の工部大学校土木科第二期生で共に新進気鋭の技術者です。清水は、すでに明治一四年から大垣に出張していますが、この度、改めてデ・レーケ付けを命じられました。こ



明治の改修計画平面図(木曾川文庫展示物)

歴史ドキュメント



明治19年の改修計画縦断面図に書かれたデ・レーケのサイン

れ以降、この二人が中心となつて、デ・レーケの指導を受けながら木曾川改修計画の作成を行いました。

このことについて、デ・レーケは、エッセルへの手紙に次のように書いています。

「美濃の農民達は、今年の水害で百万円以上の損害を受けました。それは気の毒です。全部の土地を排水するほどの大工事の費用はありませんが、全地図と同様、水準測量等もまた、準備され、五名の助手によって実施計画が始まりました。もし、来春、その計画が完成したら、私が、最終的に手を入れます。」(二八八四年一月二三日付手紙より)

デ・レーケがオランダへ帰国している間も清水涪・佐伯敦崇を中心に改修計画作成の作業が続けられ、明治一八年一月には完成していました。八ヶ月の休暇を終えたデ・レーケは、明治一八年の洪水による淀川の破堤や木曾川の氾濫実態を考慮して再検討し、改修計画の変更を命じました。清水等は、明治一九年六、七月には計画書を完成させたいと考えていましたから、デ・レーケのこの変更命令は、大きな工程変更を余儀なくされました

が、順調に進展した模様で、四月にデ・レーケがエッセルに送った手紙には「木曾川改修全体計画は、現在ほとんど完了しています」と書いています。

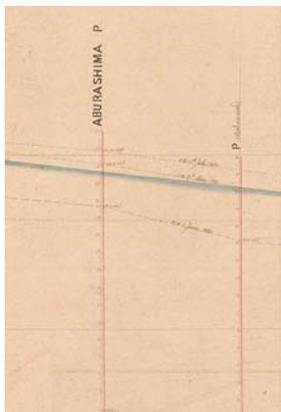
公表された改修計画

改修計画のための平面図は、木曾川では笠松町。長良川は岐阜市。揖斐川は大垣市津村町を上流端として河口までを範囲として作られていました。

改修計画は、桑原輪中(羽島市)の南端で木曾川に合流していた長良川は、木曾川と分離され、油島で合流していた木曾川と揖斐川は完全に分離されました。

長良川と揖斐川の分離については、明治一二年(一八七八)の段階では、今後検討するとしていましたが、木曾川・長良川・揖斐川が完全に分離されて、並行して河口まで流れる完全な三川分離の形で計画されました。

木曾三川の改修計画では、計画流量と計画高水位が定められています。これは、現在では常識ですが、当時の治水工事では見られない画期的な計画手法でした。これに基づいて、堤防の高



明治19年の改修計画縦断面図に書かれた3ヶ年の洪水水位

さと川中が定められています。

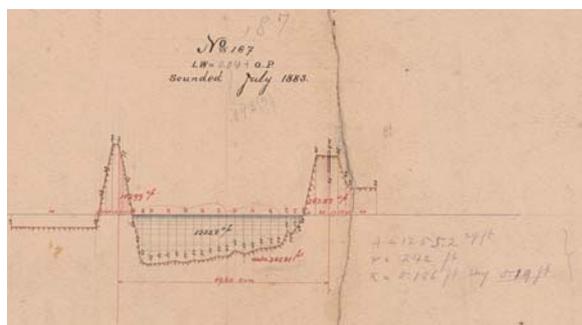
流域の正確な地形図や雨量資料が存在していなかった時代に、どのような手法によって、計画流量を決定したのかは不明ですが、明治一四年・一七年・一八年の洪水水位が縦断面図に描かれていることから、バザン公式によって、洪水痕跡から逆算してこれらの洪水流量を算定し、これを基にして計画流量を決定したものと推定されます。

改修計画平面図には、赤線で新しい堤防法線が描かれ、木曾川の立田輪中、長良川の高須輪中や長島輪中では新しい河道が開削される計画とされています。また、舟運路を確保するための低水路を固定するためにケレップ水制が緑色で書かれています。その数は三百九七を数えることが出来ます。

工事着工へ

明治一九年一二月、西村捨三土木局長は、一〇日から一〇日間木曾川流域に滞在し、改修地域を視察すると共に、一八日には、大垣において岐阜・愛知・三重の三県知事と会談し、改修工事にもなう用地の取得について基本線を取りまとめ、いよいよ工事着工が目前となってきました。

■参考文献
『岐阜県治水史』 岐阜県 昭和二八年
『デ・レーケの書簡集(未定稿)』 上林好之
『近代日本総合年表』 一九九一年 岩波書店



河積・径深など水理計算のための諸量が書き込まれた横断面図



観測水位が書き込まれた平面図



蘭人工師デレーケの治水思想(二)

―砂防を中心として―

花園大学名誉教授 文学博士 伊藤安男氏



伊藤 安男氏

立命館大学文学部地理学科卒業。花園大学名誉教授文学博士。岐阜地理学会会長、岐阜県古地図文化研究会会長。主なる著書「輪中」「ふるさとの宝物、輪中」「写真集、輪中」「変容する輪中」「空から見た名古屋・岐阜」「岐阜県地理地名事典」「岐阜県地理あるき」「東山道の景観と変貌」「長良川をあるく」「安八町、9.12豪雨災害誌」「治水思想の風土」「地図で読む岐阜」(単行本のみ)など多数。現在大垣市在住。

一、はじめに

デレーケが木曾三川の流域調査に来たのは、明治十一年(一八七八)のことである。その期間は二月三日から三月八日までである。

その際の調査報告書が『木曾揖斐長柄及庄内川流派概況』(木曾川概説)である。その緒言に「現況ヲ修理スル方法ヲ確示致シ候ニハ充分ニ有之候」とあり、彼の木曾川改修にかかる自信を窺うことができる。これは淀川水系その他の河川での体験からくるものと考えられる。

本誌先号の六三号で述べた木津川に流入する不動川の水源砂防について、地元民は「植込ノ苗木ハ自ラ成長ヲナシ青々ト生立居候 右ノ事業ハ去ル八年筆者注明治八年)工師(筆者注デレーケ)施業致サセ置候場所：堰堤(洋語ダム)ハ破壊ヲナサズ 流砂コレニテ止メ：自ラ帆山ハ青山ニ化シ候旨 此工事重要タルベク旨申聞候」とその成果を記している。また明治一六年の新聞記事に

「先に府庁にて淀川筋の砂防工事を起こされてより 沿村各村の農民は為めに幸福を享くること尠からざるを以て歓喜の余り出したものか 河内交野郡森村戸長：より松樹苗一万二千五百本を寄附致し度旨府庁へ願出たり」と②

この反面、デレーケの砂防士を痛烈に批判したのが地元の京都府技師市川義方であった。彼は明治二八年に『水理眞寶』を著し、その上巻の巻頭にて「右氏(筆者注デレーケ)ノ工事ノ結果ヲ實ニ詳細ニ記録セシハ後人ノ参考ニ備ヘテ其理ヲ曉ラシメ國家ノ為ニ再タヒ過誤失錯ナカラシメン為ナリ」と③している。

二、工事中の治水対策

明治二〇年(一八八七)に木曾三川の改修工事が着工されるが、それに先立ちデレーケ指導のもとに水源砂防工が施工されたことは広く知られている。しかし以前に近代的な治水対策が主要河川で行われたことは、木曾三川流域では意外と知られていない。それは量水標の設置と粗架工法による水制であ

る。現在では現地で後者をケレップ水制と称しているが、ケレップはオランダ語の Krippen(水制)である。

明治五年(一八七二)に最初に来日した長工師ドールン(Cornelis Johannes Van Doorn)は、直ちにわが国最初の量水標を利根川の境町(茨城県猿島郡)に、

次いで淀川の毛馬(大阪市)、中之島に設置する。翌年の明治六年には揖斐川の今尾(海津市平田町今尾)に岐阜県最初の量水標が設置される。

当時の岐阜県庁土木掛の日記に次のように記録されている。④
明治六年五月二十日

一、岐阜縣貫属土族瀬尾繁美同土族服部敏二人へ揖斐川筋安八郡今尾村水位日表取扱申付晝夜毎一時検査セシム(志人送附料雜費共一ヶ月金六圓換錢五里宛)依テ今尾村二量水杭番小屋(附出)出来時計巻挺日時計巻挺水位表用品ヲ備品トス
とある。以後は同月二五日に木曾川筋の森下村、同日に中島郡駒塚村、海西郡成戸村、二九日には長良川筋の羽栗

郡本郷村、翌三〇日には木曾川筋の羽栗郡田代村六月二日長良川筋本巢郡前野村、六月八日揖斐川筋安八郡津村水位日表取扱申付とあり、明治六年五月二〇日より六月八日まで八ヶ所の量水標を設置している。

この近代的な治水策とともに、オランダがそのルーツとされる粗架工法も施工されていく。前述の岐阜県庁土木掛の日記からそれらを記してみよう。
明治十一年五月九日

一、西村八等属伊藤等外一等出仕各務郡前渡村粗架工場場所付トシテ出張
同年十二月十一日

一、西村八等属松原等外一等出仕揖斐川通粗架工目論見トシテ出張又同十六日西村八等属帰縣
これらの日記を総括すると揖斐川筋では安八郡塩喰村、平村、松内村、石津郡東駒野村、外新田村、安田村、大野郡松野村などが明治一二年一月六日まで工事にされている。翌年二月には木曾川筋の羽栗郡等松村、田代村、海

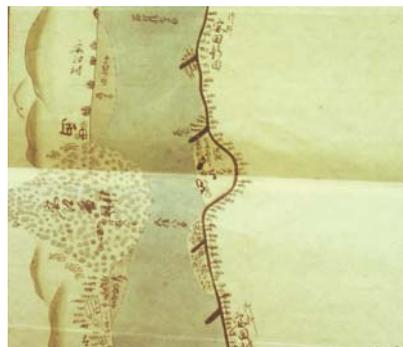
「…今後工事ノ順序ヲ問二揖斐川ニ流出スル土砂扞止ヲ第一トス」^⑤と述べている。養老山

なかでも揖斐川については「…今後工事ノ順序ヲ問二揖斐川ニ流出スル土砂扞止ヲ第一トス」^⑤と述べている。養老山

本誌六三号で述べたように、蘭人工師たちは大阪築港にあたり流送土砂による河口部堆砂の問題を第一条件としたと同様に、木曾三川においてもデレーケは木曾三川分離の河身改修工事以前に、各川に流出する土砂防止を第一とした。

三、養老山地の土石流

西郡成戸村に、続いて揖斐川の安八郡福東村、牧村、長良川の森部村、厚見郡鏡島村などに施工されている。これらの粗朶工法による水制は現在も若干残されており、土地の人々はこれを沈床と称している。近年になりこの工法は伝統的工法として注目されて、岐阜県立森林文化アカデミーの田端英雄教授により研究されている。



写真① 安江谷(盤若谷)の土石流(砂馳出)水論図—対岸は本阿弥輪中、迂回堤防は破堤地—(大垣市図書館所蔵)



写真② 現在の安江谷扇状地と揖斐川狭窄部—写真①と同一場所—

なかに「…今後工事ノ順序ヲ問二揖斐川ニ流出スル土砂扞止ヲ第一トス」^⑤と述べている。養老山

なかでもデレーケが岐阜県下で最初に施工した盤若谷(安江谷)。そして羽根谷は扇端部が揖斐川に埋込むため、土石流の堆砂により河床が上昇するだけでなく、河道に狭窄部が形成され水

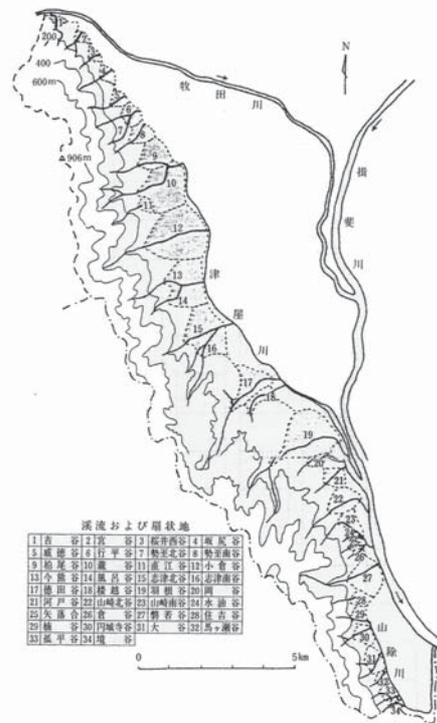
養老山地の土石流の惨状に対し、羽根谷、山崎谷では自普請にて谷除工事が再々に行われており、その災害の激しさを村明細帳より知ることができる。(写真③) この連年の土砂災害への対応として宝暦治水の三之手普請に土砂留が組みこまれている。(写真④) 当時の願出に「…羽根村駒野村立



写真⑤ 谷替前の羽根谷(名古屋大学蔵)



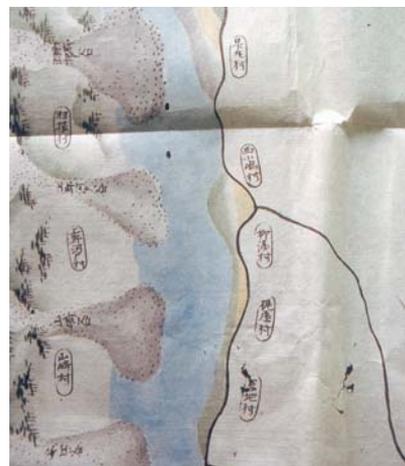
写真⑥ 谷替後の羽根谷(名古屋大学蔵)



図① 養老山地の扇状地分布図(木村正信原図)

地は秩父古生層のチャート、砂岩よりなり、東西方向に約五〜八km、南北に約二六kmの断層山地であるが、東側のみ急斜面な断層崖をもつ傾動地塊であるため、東斜面には土石流による扇状地の発達が著しい。

行に支障が生じ、上流の村々や対岸の輪中の村々が破堤入水するため水論が生じ、しばしば対立抗争している。



写真③ 揖斐川に流出する土石流(砂馳出)—北(上)より羽根谷、上野河戸谷、山崎谷、安江谷—(名古屋大学蔵)



写真④ 宝暦治水目論見絵図にみる土石流—北(上)より羽根谷、山崎谷、安江谷—(個人蔵)

付：」^⑥と上流の村々は砂浚を、また普請では羽根谷に谷砂石留締切普請、山崎谷、安江谷に砂利除堤などの普請が行われている。この宝暦治水の土砂留普請もさしたる効果もなく、約百年後安政三年(一八五〇)には羽根谷の谷替普請を堤方役所および高木水行奉行に願出て安政五年に竣工している。^⑦ 写真⑤⑥が谷替普請前後のものである。安政五年に古谷は締切られたが、その一〇年後の慶応四年の羽根村の史料に「…尤右二不抱年々出水毎二砂石馳出田場荒所出来 既二当夏折々大雨洪

水二付 潰地多分出 此次第二テハ終二一村可及亡所は勿論之儀ニ付…」^⑧と荒廢を訴えている。この一村亡所におよぶ窮状下にデレーケの調査が明治十一年(一八七八)二月に初めて実施される。

第二回の調査は同年七月である。そのとき同行した内務省名古屋土木出張所の山崎六等属が、デレーケが指示した要点を石井土木局長に報告した「工師出張巡視ノ際ニ於ける意見」に「今後工事ノ順序ヲ問二揖斐川ニ流出スル土砂扞止ヲ第一トス…右工事ハ假令木曾川下流ノ分水無之ト雖モ 此土砂至急防止致サステハ該川へ流出シ其害不尠ニ付悪水留帯ハ必然ナリ…」^⑨と建言している。

デレーケの強い施策をうけて養老山地での砂防工が実施されていく。この工事は岐阜県最初の内務省直轄事業として、明治十一年(一八七八)より盤若谷(安江谷)より施工されるが、これは木津川水系に次ぐわが国では二番目の近代的巨石積砂防堰堤である。

羽根谷については岐阜県土木部砂防課の「養老山系 砂防の栞」(昭和四六年刊)には明治一二年施工とある。しかし奥糸滝にある『羽根谷築堤記』には「明治十一年…興工…明治二十四年三月竣工…」とある。また前述の明治期の岐阜県庁土木掛の日誌の明治一四年九月六日の項に「一、西村七等属下石津郡羽根山崎ノ両谷当十四年度砂防工

事施工ノ箇所目論見トシテ出張十日帰縣」とある。さらに水源に近い第一砂防堰堤の南端の竣工碑に「明治二十年四月一日着工 明治廿一年十二月廿日竣工」とある。(写真⑦)

この三者三様の年代の相異はどう理解すべきか、今後に残された課題である。

デレーケの治山重視の砂防工の緊急性について、日本人技師には理解できず容易に普及しなかった。例えば先述の内務官僚の山崎六等属は「…木曾川修築ヲ第二トシ 今後工事ヲ土砂扞止ヲ第一トシテ着手候テハ 村落ノ人民忽チ疑惑ヲ抱キ人望ヲ失スルコト必然ナリ 因テ木曾川修築ト俱ニ砂防ノ施業アリタキ事トしている。

明治十二年一月の報告書「木曾川流域岐阜以北山林之件」で次のように強く抗議している。「該地方山林伐採ノ儀ニ付再ヒ貴下ニ左ノ件々ヲ上陳セサルヲ得ス…余再ヒ貴下ノ属官ニ告ルニ砂防事業ノ重大ナルコトヲ以テセリ然リト雖トモ如此ク同一ノ事件ヲ屢々反覆論談スルハ余ニ於テ不快ナルカユヘ其ノ聴者タル属官モ亦実ニ不快ナルヘシ…依テ余ハ茲ニ再度貴下ニ上申ス右山林荒敗ノ悪弊ヲ矯正セシニハ只法則ノミヲ要セス之レヲ施行センカ為視林巡查ノ設アラン欲ス…」

これらの強い要請をうけて内務省は明治十二年(一八七八)二月に、木曾川流域の土砂防止のため「山地作業ノ取

締を厳達し、翌年一月には甲第四号をもつて「山地諸作業取締ノ件」を布告して細則をきびしく定め、さらに一四年には焼畑禁止令を通達している。また同年八月の「木曾川流域砂防工事之件」では、砂防工費増額とともに、木曾川上流の村々がすでに自費で砂防工を施工している。これらの村々には内務大臣より表彰すべきである。そうすれば「…他ノ村民ヲシテ良模ニ倣ヲハシムルノ媒介トナルヘシ…」と結んでいる。

四、窯業・林業地域の砂防工

養老山地より始まった土砂留の砂防工は木曾三川の上流部にと進められていくことが、当時の記録から知られる。

明治一三年八月六日 「中津川ヲ発ス 苗木城山ニ登リ四方ヲ望ム 諸々兀山多シ下ツテ付知村ニ至ル

木ヲ見ズ恰毛瀬戸山ニ異ナラズ 早く之ガ防禦ヲナスニ非ザレバ 庄内川土砂埋堆ノ大禍害ヲ来スハ 又速キニアラザル可キヲ想像ス…」とあり、東濃窯業地の燃料材の乱伐を見聞きし砂防工の緊急性を同行の佐田六等属は記述している。

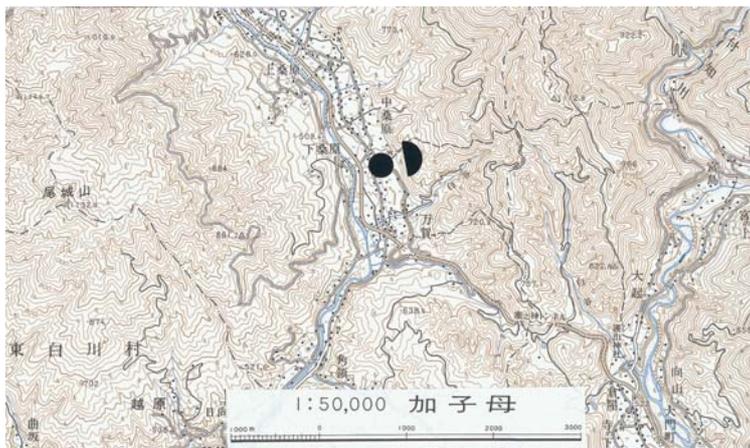


写真⑧ 加子母嫌谷の砂防堰堤—平成8年撮影—(中津川市加子母総合事務所提供)

デレーケの木曾川調査は明治一一年に三回、明治一二年に三回、翌年に二回、明治一四年に二回、明治一五年に二回、明治一六年に一回、明治一七年に二回とされている。なかでも明治一三年は七月三一日から八月一日におよぶもので木曾川水源調査をかねており、第一回調査に次ぐ長期にわたっている。第二回調査以前に加茂恵那両郡その他の木曾川支派川の実測図の作成を土木局に依頼しており、デレーケの調査目的を知ることができる。

その調査記録の一部を同行技師の報告から記してみよう。

「多治見、土岐口、肥田、土岐、釜戸等諸宿ヲ経過ス。楮山又多シ 就中土岐口村ノ如キハ 山骨皆頭レ一ノ樹



図② 加子母、嫌谷の砂防堰堤—黒丸が明治座、西が加子母川(白川)、東が付知川—(写真⑧参照)



写真⑨ 埋もれて荒廃の羽根谷砂防堰堤
—昭和43年撮影—(後藤高司撮影)

写真⑩ 発掘整備された現在の羽根谷第一砂防堰堤
—昭和62年撮影—(後藤高司撮影)

余 又山崩多シ 種々工法ヲ示ス 同
村ノ内白谷ニ類スル者五ヶ所即チイヤ
谷 和泉谷 大洞谷 木曾路谷空洞是
ナリ 略曰谷ニ等シキヲ以テ検分止ム
午後七時該村ニ泊ス^⑧
このように岐阜県下の砂防工事は、
デレーケ指導のもとに明治一一年に養
老断層山地より揖斐川に流入する盤若
谷(安江谷)に始まり羽根谷など、次い
で春日断層より揖斐川に注ぐ粕川の谷、
そして木曾、長良両川の形成した扇状
地の扇頂部にあたる岐阜の志段味、加
野、木曾川では各務ヶ原市鶴沼、さら
に中流部で両川に流入する支派川の武
儀川、津保川、蜂屋川、川浦川の各谷



写真⑦ 羽根谷砂防堰堤上の竣工碑(後藤高司撮影)

村ノ入口
字桜田下
去フ 付
知川ノ南
岸ニシテ長二百八拾間高サ平均
七間余欠壤土砂ヲ流ス工師工
法ヲ示ス:^⑧
同年八月七日 「付知ヲ発ス
途中:崩所数ヶ所ヲ検ス:工師
又種々ノ工法ヲ示ス:加子母ニ
至リ午飯ヲ喫ス、午後同村字白
谷ニ至ル 谷ハ村ヲ距ル凡壹里

に、木曾川筋では可児川とその下
流の矢戸川、姫川、大森川、久々
利川、次の段階では上流の阿木川、
飯沼川、中津川、四ツ目川、付知川、
白川(加子母川)などで施工された。
なかでも支派川のうち白川(加子
母川)上流部の、加子母嫌谷の堰堤
は現在もよく整備されている(写真
⑧)(図②)この谷は小さな扇状地を
形成しており、その扇端部に岐阜
県指定重要有形民俗文化財の明治座が
ある。創建は明治二十七年(一八九四)
であり、嫌谷の砂防工が築堤されたこと
により土砂災害の危険が除去されたこと
で、この場所に建てられたという。
デレーケの事績については、従来は
宝暦治水の哀史に埋もれて殆んど知ら
れなかった。このことは本誌五九号で、
昭和四八年(一九七三)のアンケート結
果を述べた通りである。

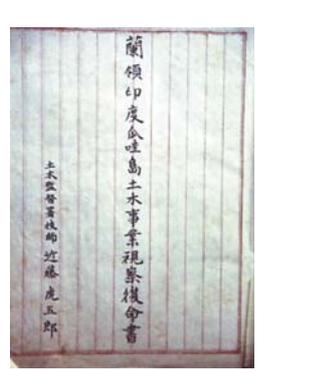
それが昭和六二年(一九八七)、木曾
三川改修工事が木曾川右岸の横溝蔵(桑
名市長島町)で着工されてより百年目
にあたることから「木曾三川近代治水百
年」として、各地でデレーケを顕彰する
行事が施行された。その一環として船
頭平(愛西市立田町)にデレーケの銅像
が建立され、同じ場所にデレーケ資料
館の木曾川文庫が創設された。そして
デレーケによる各地の砂防堰堤が始め
て脚光を浴びることとなった。
例えば羽根谷の堰堤は整備されて、
砂防遊学館も建設され、第一、第三砂

防堰堤が明治近代化遺産として国登録
有形文化財の指定をうけるが、百年記
念行事以前の羽根谷の景観を示すのが
前頁の写真⑨である。写真⑩が現景観
でありまさに滄桑の変ともいべき変
化である。また本誌六三号の拙稿で述
べた木津川の不動川の堰堤は修景保存
されて、京都府指定建造物となり、草
津川の水源砂防堰堤は筆者らの調査に
より、大津市文化財となっている。こ
れら一連の地道な文化行政を研究者の
一人としてさらなる推進を願っている。

五、あとがき

山のない国、急流河川のない国の技
術と批判されながら、蘭人工師たち
とくにデレーケは徹底した治山重視で
あった。これら事績は現在では「オラン
ダ堰堤」とか「デレーケ砂防」と称され高
く評価されている。いうならば河川一
体観の治水思想を広くもたらしたので
ある。この工師たちのノウハウはなに
に起因するのであろうか。第一に考え
られることは彼らの研究心である。エッ
セル(G.A.Escher)は帰国時(明治一
一年)にその文献四〇〇冊を内務省に寄贈
している。その大半は当時の欧州の代
表的な砂防関係と日本に関するもので
あった。工師たちはわが国の自然的環
境を現場で学びつつ、外国の教本を基
に研究しつつ施工したものであろう。

第二はオランダはすでに蘭領印度(現
インドネシア)を植民地としており、と



写真⑪ オランダ領ジャワ島視察報告書(国交省淀川河川工務所淀川資料館蔵)

くにジャワ島での土木事業は植民地史
上でも高く評価されている。それはプ
ランテーション農業のエステート開発
には火山灰地域での砂防工は不可欠で
あった。これらの技術は工師たちに当
然もたらされたであろう。その証左は、
日本人技師の瓜哇島シヤワ島視察で
ある。写真⑪これはデレーケの強い要
請によるものと考えられる。
なお、この稿は国際日本文化研究セ
ンターおよび立命館大学歴史都市防災
研究センターで発表したものの一部で
ある。

参考文献

- ①全国治水砂防協会『日本砂防史』七九三頁
昭和五六年
- ②明治一六年五月二九日 大阪朝日新聞
- ③市川義方『水理真寶』巻上一丁 明治一八年
- ④第一稿 木曾川改修編年誌
從明治六年至一〇年 昭和一五年二月一四日写
(森義一文書)
- ⑤工師出張巡視ノ際ニ於ケル意見内務省名古屋
屋土木出張所森義一文書 明治四三年
- ⑥南濃町『南濃町史 史料編』羽根谷急出砂凌御
普請願 宝曆四年六八七頁 昭和五二年
- ⑦南濃町『南濃町史 通史編』三〇二頁
昭和五七年
- ⑧前掲書⑥(羽根・駒野立合谷砂石馳出に付嘆願
慶応四年)七二二頁
- ⑨前掲書⑥
- ⑩前掲書④
- 岐阜県『岐阜県治水史(下)』一三五頁
昭和二八年

業平寺の大蛇

垂井町表佐おさ

在原業平は六歌仙のひとりと称えられた平安時代の歌人です。

権守(国司の長官に準じた官職)として

美濃国へ赴任し、垂井町の表佐に御殿を建てました。

村人から業平寺と呼ばれたその御殿はとても広くそのひとすみには、底なし沼があったようです。

ある日のこと、

業平が池の近くを散歩していたところ、

突然、池の水が、渦を巻きはじめ、

目をぎらぎらさせた大蛇が、

池の真ん中に姿を見せました。

驚いた業平は、一目散に逃げ出しましたが、

そんな業平を、美しい女の声が追いかけてきました。

「私はこの池に昔から住んでいる大蛇です。

今日、天へ昇ろうしましたが、この姿を見られたら、

もう天へ昇ることはできません。

私は、もう一度修業をやり直します。

今度、天へ昇れるのはいつになるかわかりませんが、

その日までこの池に住んでいます。

もし、雨などほしいときは、

私がお手伝いしましょう」

業平がこわごわ後ろを振り向いたときには、

大蛇の姿はなく、池の水面は何もなかった

ように静かに輝いていました。

そのあくる年は、大日照り。

大蛇の言葉を思い出した業平は、

池のまわりにしめ縄を張り、村人たちとともに、

雨乞いのお祈りをしました。



すると、どうでしょう。

しばらくすると、池の水がさざめきだし、

真っ黒な雲が天を走り、

大粒の雨が降り出しました。

「雨じゃ、雨じゃ」

「なんと、ありがたいことじゃ」

村人たちは、喜びのあまり、踊りだしました。

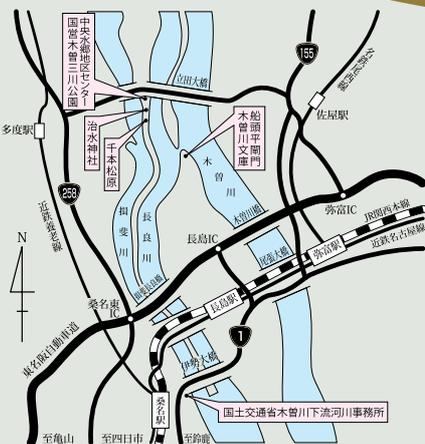
それから、日照りになると、

村人たちは、業平寺へ集まって、

雨乞いをするようになりました。

この業平寺は、江戸時代に薬師寺として再興されました。

木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前8時30分～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日(月曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋西詰から車で約10分

名神羽島I.Cから車で約30分

東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平閘門管理所・

木曾川文庫

〒496-0947 愛知県

愛西市立田町福原

TEL (0567) 24-6233



●表紙写真● 上左:垂井の泉 上右:不破の滝 下:相川

編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

今号の編集にあたって、岐阜県垂井町の皆様及び、伊藤安男氏にご協力いただきありがとうございます。お礼申し上げます。

今回は、中津川市を特集します。ご期待ください。

宛先「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

木曾川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>